
深夜に鳴り響くオフィスの電話

ぽて

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深夜に鳴り響くオフィスの電話

【Nコード】

N2714J

【作者名】

ぼて

【あらすじ】

深夜、突然オフィスの電話が鳴り響いた。名前も顔も知らない電話の相手に、ヒロシの心は揺り動かされていく。不思議な出会いから始まる恋愛物語です。

第一部

1

深夜のオフィスにベルが鳴った。

電話が鳴るといふ昼間は当たり前前の光景も、さすがに今の時間、違和感を感じずにはいられなかった。

私はちょうどその時、一人で仕事をしていた。

とは言ってもサッカー中継をワンセグテレビで見ながらの、遅々としてはかどらない作業である。

すぐ目の前の電話が鳴っていた。辺りの静寂を切り裂くほどの音は、事務所内の電話機の存在を知らしめるのに十分であった。私は一瞬躊躇したものの、やはり昼間と変らぬ素早さで受話器を持ち上げた。

「もしもし？」

昼間だったらこんな電話の応対はない。深夜という状況が、私に少々の無礼を許していた。

相手は無言だった。

受話器の向こうからは、激しい雨音だけがしきりに聞こえてくる。いや、そうではないとすぐに気がついた。これは大勢の人々が生み出す喧騒である。都会の駅か、あるいはコンサート会場か、とにかく人の集まる場所を連想した。

「もしもし？」

もう一度、声を掛けてみた。

しかし相手は黙ったままである。これはどうやら、いたずら電話確定である。

電話の向こうで、ほくそ笑んでいる輩が目に見えなかつた。

私はこんな電話に関わったことをひどく後悔した。

サッカーの経過が気になった。国際試合がまもなく終了しようと

いう大事な場面である。こんな電話に付き合っている場合ではない。「切りますよ」

念のため、そんなことを言った。会社に掛かってきたからには、相手が顧客という可能性も否定できない。それは万が一のための防御策でもあった。

相手からの返答がないことを確認して、私は受話器を戻そうとした。

しかし次の瞬間、喧騒を押しつけるかのように、意志ある声が発せられたようだった。

私は慌てて手を止めた。もう一瞬遅かったら、電話を切っていたところである。

私は受話器を耳に押し当てた。

こんな深夜に、まともな電話だとは到底思われなかった。しかし、もしもということもある。相手に積極的な意志があるのなら、誠意ある応対をすべきである。こんな時にもビジネスマン精神が顔を出した。

「もしもし?」

私は相手を探るように言った。

相変わらず電話の向こうは、雑音だけが充満している。

しかしおかしなことに、その音が二重に聞こえるのである。

ほんのわずかな遅延があるものの、まったく同じ波長が耳に届いていた。

そうか、今やっと分かった。

この音声はサッカー中継のものである。試合を見守る観客の声援がまるで洪水のように聞こえていたのだ。

電話の相手も、同じテレビ放送を観ているらしい。

「もしもし?」

やっと相手の声が応じてくれた。

それは女性の声だった。

「あの、どちら様でしょうか?」

その声の主は、不安を隠せない様子である。しかしそちらから掛けておいて、どちら様もあったものではない。

だが、これをいたずら電話と片付けるには、どこか妙な案配である。

何と言つか、相手に誠実さが感じられるのだ。

私は言葉を選んだ。

「この電話はあなたがお掛けになったものですが」

「えっ？」

女性はこの状況をまるで把握できていなかった。

慌てて電話機を耳から引き剥がし、何かを確認している様子である。

「ああ、ごめんなさい。これ携帯電話なんです、知らぬ間にポタンに触れて、偶然あなたに掛かっていたみたいです。本当にごめんなさい」

女性の声はひどく恐縮していた。

「別にいいですよ」

いたずら電話ではなかった。私には自然と寛容な気持ちが生まれていた。

突然、テレビから割れんばかりの歓声が沸いた。

電話からも少し遅れて同じ音が聞こえてくる。奇妙な立体音響が私を包み込んだ。

「あつ、日本勝ちましたよ」

彼女の嬉しそうな声がかろうじて聞こえた。

「どうやらそのようですね」

「あなたもご覧になってたのですか？」

「はい。ずっと観てました。今日は苦しい展開になりましたね」

実は仕事そつちのけで、試合の行方ばかり気にしていた。特に後半は目の離せない状況だった。この電話のせいで、最後の最後は見届けられなかったが。

「私、サッカーのことは詳しく分かりませんが、選手はよく頑

張ったと思います」

私は不思議な気分にもまれた。

見知らぬ女性と、こうしてサッカー談義に花を咲かせている。これは一体どういう状況なのだろう。そもそもこれは間違い電話なのである。考えてみれば、お互いに意気投合するというのがもおかしな話ではないか。

同じ国に住む者同士が、自国の勝利に酔いしれる。そんな特別な夜が、今の二人に時間を共有させてくれるのだろう。

彼女はテレビを消したようだった。

受話器の中は突然静まりかえった。

「どうもすみませんでした、お休みのところ」

「いえいえ、こちらは会社ですので、全然問題なしです」

「あら、こんな時間までお仕事されていたのですか？」

彼女は驚いたようだった。

「ええ、今日は事務所に泊まりです」

「へえ」

彼女は感心するような声を上げた。

そしてくすつと笑うと、

「実は私も今、仕事場にいるんですよ」

と言った。

「本当ですか？」

「はい」

彼女は嬉しそうに言う。

深夜に会社で仕事をしているという共通点が、一気に二人の垣根を取り払った。ちょうど良い話し相手と巡り会えた気分である。

どうやら彼女も同じ気持ちのようである。

その証拠に、間違い電話を切るうとはしない。

私はもうしばらく彼女との時間を楽しもうという気になった。

こちらでテレビを切って、きちんと椅子に座り直した。

がらんとした事務所に、スチール椅子のきしむ音だけが響いた。

窓から差し込む月明かりが、遠くの机まで青白く染めている。

「今、話し込んでも大丈夫ですか？」

私は念のために訊いてみた。

こちらはともかく、彼女が忙しいのなら、仕事の邪魔をしてはならない。私もビジネスマンの端くれである。その程度の気遣いは当然だった。

「仕事の方は大丈夫です。どうせ、集中力もすっかりなくなっていますから」

彼女の声は弾んでいた。

どうやら向こうも事務所に一人きりのようだった。こんな深夜にきばきと仕事が付くはずもない。それはお互い様である。

私は彼女に興味を湧いていた。

「お仕事は何されているんですか？」

無遠慮にもそんなことを訊いていた。ついさつき出会ったばかりの女性に、こんなに気軽に話せるのは何故なのだろう。

互いの境遇があまりにも似ていて、一種の連帯意識が生まれているのかも知れない。彼女とは以前からの知り合いのような気がしてくる。

「積算です」

「セキサン？」

聞き慣れない言葉に、思わずオウム返しになった。

「ビル建材の見積もりをしています」

「ほう」

私はそんな言葉しか発することができなかった。

まるで知らない世界である。何だか聞いただけでも大変そうな仕事である。それを一人こんな時間まで取り組む彼女は、とても輝いて見えた。

「見積もりというのは、こんな深夜までかかるものですか？」

素朴な疑問だった。

電話の向こうで、彼女の笑う声が聞こえる。

「私の要領が悪いだけなんですよ」

それはおそらく謙遜だろう。私はそう直感した。

「パソコンで打ち出す訳にはいかないのですか？」

「確かにそうやって、大まかには出せますが、細かい所はどうしても凶面を見て拾わなくてはならないんです」

「へえ、そういうものですか？」

「はい。ビル物件は、特にお店関係だと、奇抜なデザインが多くて、全てを機械任せって訳にはいかないのです」
「なるほど」

これでは、職場見学にやって来た小学生の質問である。あまりに無知な自分が恥ずかしくなる。異業種についてまるで知識がないことに驚かされる。

「上司はとつくに帰っちゃったんでしょ？」

「はい」

「あなたはそれだけ信頼されているということですね」

私はそんなふうに彼女を褒めた。そうでもしないと、自分の恥ずかしい立場が帳消しになりそうもなかった。

「全然そんなことないですよ。一応、所属は積算課ですけど、地方営業所ですから事務と兼任なんです。だから雑用の合間に見積もりをするのですが、昼間忙しいと、こんなふうに深夜までかかってしまうのです」

このご時世、どこの会社でも社員は楽させてもらえないようだ。

やはり私と彼女は同じ境遇なのだと再認識した。

「はい、次はあなたの番」

「えっ？」

「あなたの仕事のことも教えてくださいよ」

深夜だというのに、電話の中の彼女はしゃいでいた。

休み明け、久しぶりに学校で再会した友達を前に、話の尽きない女子高生といった感じである。

今夜知り合ったばかりの私に、どうしてそんな気分になれるのか、

ちよつと不思議な気もする。

「あなたのお仕事は何ですか？」

彼女は重ねて訊いてきた。

深夜の事務所を取る電話は、相手の息遣いまで聞こえてくる。

昼間では想像もつかない、音のない空間。

まるで真空を思わせるこの場所では、彼女の声が間近に聞こえる。まるですぐ目の前から私に話し掛けていているような錯覚に陥る。

私は一度受話器をしっかりと握り直した。

「家電メーカーの販売会社で営業をしています」

自分を飾ることなく、正直にそう言った。営業という職業は、物を円滑に進めるためならば、平気で相手に嘘をつく準備ができている。

しかし彼女の前では正直でいようと思った。

「そうなんですか」

彼女は興味深げに言った。

「聞こえはいいかもしれませんが、実際は大型量販店の小間使いみたいなものですよ」

「いつもこんな深夜まで、お仕事されているんですか？」

「いえ、いつもではないです。明日は朝早くからヘルパーの仕事がありますので、このまま家に帰らず、事務所で寝泊まりなんです」

「大変なんですね」

彼女の言葉には心がこもっていた。

そして、やや間を置いてから、

「あの、ヘルパーって何ですか？」

と訊いた。

「ほら、家電量販店では、土日によくセールをやるじゃないですか。そんな時は人手が足りないのです、僕らが借り出されるといふ訳です」

「なるほど。ではお給料はそのお店から貰うのですか？」

「いえ、違います。自社製品を納入してもらつた代わりに、僕らの

労働力を無償で提供してるんです」

「あら、そうなんですか」

彼女は驚きの声を上げた。

「でも、店に来たお客さんには、自社製品をどんどん売ればいいんでしょ？」

私は思わず笑ってしまった。

彼女はまるで業界のことを分かっている感じがしない。一般人の知識とはそんなものかもしれない。

「いえいえ、そういう訳にはいきません。量販店の方からは、一店員として雇われているだけなので、勝手に自社製品を売り込むのはダメなのです」

「えっ、まさか」

彼女はさらに驚いたようだった。

「でも、それってストレス溜まりませんか？ 他社製品を扱うお客の相手をするだなんて」

「まあ、確かにそうかも知れませんが。僕も最初はそんな気がしました。でも、もう慣れてしまって、今では割り切っていますよ」

「そうですか。明日もお仕事なんですか」

彼女の声は同情的だった。

「あなたは、明日は？」

「私は別に出社する必要はないですけど、この見積もりの納期が月曜の朝なんです。だからそれまでに仕上げておかないと」

「それも大変ですね、心が落ち着かないでしょ？」

「そうなんです。お風呂に入っただけでも、ご飯を食べていても、見積もりのことが頭から離れないんです。それで夜も眠れないことだってあるんですよ」

彼女は一気にまくし立てた。まるで仲の良い友達に愚痴るような勢いだった。よほど胸の内に秘めた想いがあるらしかった。

「そうだね、あなたに訊きたいことがあるのですけれど、いいかしらっ」

一息つくくと、彼女はそう切り出した。

2

誰もいない深夜の事務所に、確実に時だけが流れていた。

窓の外では、徐々に闇の濃淡が変化しているのが分かる。サッカーの試合が終わってから、もうどれくらい経つのだろうか。

私は受話器を持つ手に少し疲れを感じて、耳と肩で受話器を挟み込むようにした。これは昼間、電話中でも両手を自由に動かせるスタイルである。

「どうぞ、私に答えられることでしたら何でも」

「私、アパートに一人暮らしで、今、部屋に置けるテレビを探しているんです。でもどうして小さいテレビって、割高なんですか？」

彼女の声からは、日頃の不満が伝わってくる。なるほど、そういう話か。

私は家電を扱う仕事をしているので、聞いた瞬間に答えの準備ができていた。

彼女の苦情はまだ続いている。

「それに小型のテレビって、あまりお店に置いてないから、選択の幅も少ないんです」

「確かにそうかも知れませんがね」

そうは言ってみたものの、これではまるでお客からの電話相談だな、と思った。昼間やるべき仕事を、こんな真夜中に行っている自分が可笑しかった。

もっとお互いのことを話題にしたいのだが、彼女が訊きたいと言っただから仕方がない。

自分はその筋のプロである。ちょっと真面目に答えてやろう、という気になった。

「メーカーというのはどうしても売れ筋商品に力を入れますから、自然と大型テレビばかりが充実するのです」

「そうなんですか」

彼女はまだ納得がいかない様子である。

「テレビの買い換えは、リビングに置く大型テレビが主になりますので、その流通量も圧倒的に多くなります。そこでは当然、価格競争も起きますから、小型テレビに比べて割安に感じられるという訳です」

「なるほど、分かりました。さすが専門家ですね」

彼女はすっかり感心した様子だった。

私は少し照れくさくなった。

「質問って、それだけ？」

「はい、でも今後は小型テレビも安くなりますよね？」

彼女はまだ価格のことを気にしているようだ。

「予測は難しいですが、数年はこのままのような気がします」

「そうですね」

彼女の残念そうな声が漏れた。

「テレビ、壊れたんですか？」

私は訊いてみた。

「ええ、スイッチを入れても、ブーンって音がするだけで、画面に何も映らないんです」

「それはブラウン管の寿命かもしれません」

「やっぱりそうですか？」

「昔のは叩いたりすると直ったそうですが、今はそんなふうには直りませんからね」

「恥ずかしくて会社の人にも訊けないから、一人で困っていたのです。やはり壊れていたのですね」

「どうやらそのようです」

そんな話をしている間にも、遠くの空が明るくなってきた。

彼女もそれに気づいたらしく、

「もう夜が明けてきたみたい」
と感慨深げに言った。

名前も顔も知らない女性。そんな女性とこうして他愛のない話をしている。

それは私にとって、一夜の不思議な体験と言う他なかった。果たして彼女の方はどう思っているのだろうか。

「あっ」

突然、彼女が小さな声を漏らした。

「ちよつと待ってくださいね」

それだけ言つと、黙り込んでしまった。

ただ携帯電話は手に持っているらしく、コツコツという彼女の靴音だけが聞こえてくる。

私は痛いほど、ぎゅつと受話器を耳に押し当てた。

ドアが開かれる。

「おはようございます」

彼女は誰かに向けて優しい声で挨拶した。

そしてまた靴音。

電話口にやつと彼女の声に戻ってきた。

「ごめんなさい。今、新聞屋さんが来たので」

「えつ、もうそんな時間ですか？」

私は慌てて時計を見た。

まもなく五時を指そうとしている。

二人は随分と話し込んだものである。

「今、とても恥ずかしかったですよ」

「何が？」

「だって、ウチの事務所は硝子窓から中が丸見えなんです。一カ所だけ蛍光灯が点いていて、その下に制服姿の私が座っているんですよ。新聞配達の人は、おそらくびっくりしたんじゃないかしら」
私はそんな様子が目に浮かんで、思わず笑ってしまった。

「笑いごとじゃないですよ」

彼女は軽く抗議した。

「会社の制服を着て仕事していたんですか？」

「そうですね。だって夕方からずっと見積もりに没頭していて、着替える暇もありませんでしたから」

「どうせなら、パジャマに着替えていればよかったのに」

「それじゃ、みんな集まって来ますよ。あそこにヘンな女がいるぞ、って」

二人は笑い合った。

「では、そろそろお別れにしましょうか？」

私はそう提案した。

「そうですね」

彼女もすんなり応じる。

私はもう一度考えてみた。彼女にとって、今夜の私は迷惑ではなかっただろうか。

彼女の様子からすると、大丈夫だと思われた。

事務所で一人孤独に見積もりをしていた彼女。私のことを砂漠で偶然見つけたオアシスのように思ったのかも知れない。

「お仕事の邪魔をして、すみませんでしたね」

私は一応そんな言葉を掛けてみた。

「全然、そんなことはありません。むしろとっても楽しかったです。しかし目の前には、未完成の見積書がそのままになっているのが、ちよつと気になりますか」

彼女は面白い女性である。私は知らず彼女に好感を抱いていた。

彼女の方は私にどんな印象を持っただろうか。

「また間違い電話しても構いませんか？」

彼女はそんなことを言った。

「どうぞ、どうぞ。うちの会社は間違い電話、大歓迎ですから」

「よかった。それでは、また深夜に掛けちゃいますよ」

「はい、こちらも残業していたら、すぐに電話に出ますので」

彼女は電話の向こうで笑った。

「あつ、そうだ」

私はあることを思いついた。

「一応、仮の名前を教えてくださいませんか？」

「仮の？」

彼女は聞き返した。

「間違い電話なんですから、本名は要りません」

「ああ、そうですね」

彼女も私の提案に乗ってくる。

少し考えてから、

「では私は、見積もりのミツコということに」

私は思わず吹き出してしまった。

「じゃあ、僕は卸しの仕事をしていますから、オロシ」

「えっ？　いくら何でもオロシは変じゃないですか？　せめてヒ

ロシでお願いします」

彼女は笑いながら言った。

「分かりました、ヒロシでいいです」

「それじゃ、おやすみなさい、ヒロシさん」

「おやすみ、ミツコさん」

受話器を戻した時には、外はすっかり明るくなっていた。

私は吸い寄せられるように、席を立つと窓際へ向かった。それから窓枠に両手をついた。

陽はまだ昇ってはいない。それでも窓から見る景色は、昼間の様子と何ら変わりがなかった。

違うのは、その風景に人の営みを感じられないことである。

歩道には人影はなく、大通りも嘘のように車がなかった。信号機だけが意味もなく、黙々とその色を変え続けている。

私はそんな景色をぼんやりと眺めて、ミツコとの会話の余韻を楽しんでいた。

不思議な夜だった、と思う。

きつかけは、一本の間違い電話だった。

どこか知らない街から一人の女性が飛んできた。そして突然私の前に舞い降りた。

彼女は孤独に働く女性であった。話せば、私たちは境遇の似た者同士だった。

ビジネスの世界では、嘘や駆け引きの人間関係はさほど珍しいものではない。そこでは、自分の感情を抑え込み、物事が円滑に流れることだけを期待している。

現に私の目の前に置かれた電話機は、昼間はそんなやり取りの道具に成り下がっている。

しかし深夜のミツコとの電話はまるで違っていた。偶然結ばれた二人は、素直な気持ちで本音を語り合った。

私はミツコの前で嘘を言ったり、自分を飾ろうなどとは少しも考えなかった。お互いにあるのままを認め合えれば、それでよかったのだ。

どこかから鳥のさえずりが聞こえていた。

徹夜明けだというのに、私の身体はまるで疲れを感じていなかった。今日一日働いたための活力が、たった今充電されたような気がした。

ミツコがどこか私の知らない場所で、一人仕事に精を出している。彼女の傍に助けしてくれる人はいない。もちろん私の手だって届かない。

しかし私が精力的に働くことで、ミツコとはもっと深く関わられるような気がする。間接的ではあるが、それが彼女を手助けできる唯一の方法のように思われた。

私はそれから二時間程、応接室に置かれたソファで仮眠を取り、その後量販店に出向いた。

現地では顔見知りの店長から指示を受けて、他社のヘルパーとともに倉庫の荷出しを手伝った。

そして開店時間にはハッピを着て、受け持ちのエアコン売り場に立っていた。

ミツコとはあんな偶然の出会いを果たしたのだから、彼女がこの店にぶらりと現れてもおかしくはない。そんな思いが私の頭の中を駆け巡っていた。彼女は私にとって、それほどの存在感があった。

自分の持ち場から少し離れた場所に、大型テレビがずらりと並んでいる。店が開いた途端に、早速客が集まってきた。やはり今の時期、テレビを買い換える客は多い。

そこに若い女性の姿を見とめると、ひょっとしてミツコが来たのではないか、と考えた。

しかしその可能性はほとんどない。

彼女が偶然にも私と同じ街に住んでいるとは考えにくいし、それに徹夜したとなれば、今頃は家に帰って寝ている筈である。

小型のテレビ、か。

私は知らずそんな言葉を口にしていた。

アパートに一人暮らしというのなら、確かに流行りの大型テレビは必要ない。

夜遅くまで働いて、疲れた身体を引きずって家に帰ってくる。

テレビのスイッチを入れてみても、画面には何も映らない。

テレビを買い換えようにも割高ときている。

何ともひどい仕打ちではないか。

ミツコがあればだけ不満を漏らすのも無理はない。私にはかすかな笑みがこぼれた。

夕方、無事に仕事を終えて、私は帰途についた。

今日は一日中、ずっとミツコを探していた。

もちろん店に彼女は現れなかった。彼女は深夜の電話にしか出てこない幻だった。

どうして彼女のことをそんなに気になるのだろう。

私の心の中で、ミツコは家族や友人ほどの大きな存在に膨れ上がっていた。

今日の一日の出来事を彼女に報告したくなる。そして彼女の話も、もっと聞きたいと思う。

そう言えば、ミツコは例の見積もりを仕上げることができたのだろうか。

話していて、愚痴をこぼしながらも、実は彼女は仕事のできる女性に思われた。会話の中にそんな余裕が感じられた。

私は家に帰ってきて、風呂の準備をしてから、無意識にテレビの電源を入れた。

当たり前のように画面には映像が浮かび上がった。

「こちらは、今帰ってきたばかりだけど、そちらは見積もり終わったかい？」

「今日は店に出て、顔も知らない君の姿を探していたんだ」

自然とそんな言葉が湧いてくる。無性にミツコと話したくなった。ミツコはそんな私のことを思い出してくれているだろうか。

第二部

3

月曜日を迎えていた。

働く者にとつて、この日の朝ほど無慈悲なものはない。休息から労働へと精神の切り替えを余儀なくさせられる。

しかも私は休日出勤のせいで、切り替えどころの騒ぎではない。単なる労働の連続になってしまった。

それでも疲労をワイシャツで覆い隠すと、何事もなかったかのように家を出た。

会社に向かう車の中、自然とミツコのこと頭が浮かんだ。

彼女はもう出社しただろうか。今朝は見積もりの提出期限である。果たして彼女は間に合わせることができただろうか。本気で心配している自分が可笑しくなる。

しかし彼女のことである。図面の隅々まで緻密な計算を入れて、首尾よく完成したに違いない。上司からねぎらいの言葉の一つも貰つて、悠然と今日の仕事を始めているのではないだろうか。

朝の大渋滞を抜けて、ようやく会社に到着した。自分の席につくなり、電話機を見つめた。

今夜はミツコから連絡があるだろうか。

いや、その可能性は低い。私はあつさりと考えを否定した。

徹夜明けの初日から、再び夜遅くまで仕事をすると考えにくい。今日のミツコは定時に上がるのではないだろうか。

となると、今度彼女と話せるのは金曜か土曜の深夜になりそうだ。それまでは彼女に負けないよう、しっかり仕事に精を出すことにしよう。

私はミツコを思い出すことで、疲れた身体に鞭を入れているのかもしれない。

水曜日の夜だった。

得意先の棚卸しに付き合わされて、帰社したのは十時を回っていた。すでに他の社員は皆帰ってしまっていた。

営業マンは月末になると、このような予期せぬ残業を強いられることがある。

私は営業車から降りると、真っ黒な社屋を見上げた。裏口の鍵を開け、事務所に入ると明かりを点けた。

誰もいない事務所に私の足音だけが響く。

やっと自分の机まで戻って来た。書類が乱雑に積まれている。外出中に何件か電話があったようだ。それを知らせるメモがテープで貼り付けてある。

こんな雑然とした場所でも、心が落ち着くものだから不思議なものである。

私はネクタイを外して、机の上に放り投げた。
酷い一日だった。

得意先の社員の一人が風邪で寝込んでしまったのである。その欠員を補うべく、突如私が借り出されたという訳である。

営業マンは時に便利屋みたいなものだと思う。

私は同僚の椅子に足を投げ出すと、身を沈めるように、背もたれに頭をつけた。

理不尽な疲れが身体に残留している。肉体よりも先に精神が破壊されそうだった。

今日は自分の予定していた仕事ができるでできなかった。
しばらくそんなだらしない姿勢のまま、時の流れに身を委ねていった。

かろうじて残された精神が真っ先に思い出させてくれたのは、やはりミツコのことだった。

彼女は今頃どうしているだろうか。

私はこのまま会社を去る気にはなれず、時間が経つのをじっと待

ってみた。

もしかしたらミツコから電話が掛ってくるかも知れない。そんな予感がするのだ。

私たちの相性は案外良さそうである。だからどちらかが会いたいと念じれば、恐らく簡単に再会でできるような気がする。

嵐のように過ぎ去った今日一日の出来事をミツコに語りたい気分だった。

私は目を閉じて、彼女からの電話を待つことに決めた。

どのくらい眠っていたのだろう。

突然、身体に電流が走る衝撃を覚えた。知らず身を守ろうと、両足がびくと反応した。思わず椅子から転げ落ちそうになる。何とか踏みとどまった。

しかし首が痛い。長いこと不自然な格好でいたせいである。

時計を確認した。

まもなく午前一時になるところだった。

どうやらミツコからの電話はないようだ。今夜、彼女は残業してないらしい。

私はミツコが電話を掛けてくると信じて疑わなかった。根拠はまるでないのだが、自分が事務所にいるからには、彼女もいるにちがいない、そう思い込んでいた。

しかし実際、二人の心はそこまで強く結ばれてはいなかったのだ。

(今日のところは帰るとするか)

しばらく机の電話機を見つめてから、潔く立ち上がった。

金曜日、私はめずらしく定時に仕事を終わらせることができた。

今夜はミツコから電話があるだろうか。

どうも自信がなくなってきた。もしかすると、ミツコと私は互い違いに残業をして、結局連絡がつかない状態に陥っているのではないか。

いやそれよりも、彼女の方は私のことなどすっかり忘れていて、そもそも電話を掛けていない可能性だってある。

さて、今晚はどうだろうか。

しかし今この時間から深夜まではかなり時間があまる。まさかそれまでここで待っている訳にもいかない。

それに、たとえば彼女が電話を掛けてきても、こちらが待つてましたとばかりに感じるのもどこか癪である。

ミツコには、私と同じ気持ちを味わわせたいと思う。話したい時に相手はおらず、淋しい気持ちが募ってくる、まさに今の私の心境である。

ミツコが私をどう思っているのか分からないが、そろそろ私と話したい気分ではないだろうか。

彼女の気持ちを多少焦らすのも、面白い試みのような気がする。そんなことをあれこれ考えながら、私は帰途についた。

家に帰ってから、風呂に入り、テレビを観ていたが、どこか落ち着かない自分に気がついた。

どうしてだろうか。

やはりミツコのこと気が掛かる。

彼女の会社は週休二日だとは思っただが、前回の電話は確か土曜の夜だった。もしかすると隔週で土曜日が出勤日になるのだろうか。もしそうならば、明日の土曜日は休みということになる。

休み前の夜は、仕事を抱えて残業する可能性が高くなるからだろうか。

やはり今夜は彼女から電話があるような気がする。

これを逃せば、来週末まで彼女とは話すことはできなくなってしまう。

私はいつの間にか服を着替えて、仕事もない会社へ向けて出発していた。

照明のすっかり落ちた会社の駐車場に車を停めた。
今日は二度も出勤したことになる。社長が見たら、私のことを実に仕事熱心な社員と思うに違いない。

私は鍵を開けて、事務所に身体を滑り込ませた。

もし同僚と出会ったら何と言いつすればいいだろうか、そんなことがふと頭をよぎった。

自分の椅子に座ると、机にワンセグテレビを置いた。そしてスイッチを入れた。

そうだった、確かあの日もこうしてテレビを観ていたのだ。

今夜はサッカー中継こそなかったが、どうやら条件は整った気がする。

十中八九、ミツコから電話がくる、そんな自信がどこからともなく湧いた。

私はテレビを観ながら、時に受話器に目をやった。

時刻は今、十二時を回った。

彼女は絶対に今夜、電話を掛けてくる筈だ。

時が静かに流れていく。

いつしかテレビの映像は、私の目には映っていなかった。ミツコは今夜、私に会いに来てくれるのだろうか、そんな想いだけが心の中を占拠していた。

突然、事務所の中の電話が一斉に鳴り出した。

空気を震わせるその音は、別段私を驚かせなかった。

来るべきものが来た、という感じだった。

やっぱりミツコと私は相性がいいのだ、そう確信した。

「もしもし」

深夜の事務所に、私の声が力強く響き渡った。

「もしもし？」

受話器からは控え目な声が出た。その声がミツコと分かるのに、まるで時間を要しなかった。

「ヒロシさんですか？」

すっかり忘れていた。私の名前はヒロシだった。

「こんばんは、ミツコさん」

「ああ、よかった。居てくれたのですね」

電話の声は、花が咲いたように途端に明るくなった。

彼女は私との会話を心待ちにしていたのだ。

それは私も同じである。この瞬間をどれほど待ったことか。この嬉しさはどんな言葉でも言い表せそうにない。

「ミツコさんは、今日も残業ですか？」

「はい、そうなんですよ」

彼女は以前と同じ調子である。一週間という空白を一気に飛び越えた。まるであの日に戻ったようだった。一旦休憩を挟んだ後、今続きが始まったような感覚だった。

「また、一人で見積もりを？」

「はい、その通りです」

そう答えながらも、ミツコは今にも笑い出しそうである。

自分の理解者がいてくれる。そのことに彼女は喜びを感じているのだろう。

私も心が軽くなる。

今晚のスタートラインは、遙かに前進していた。お互いの立場を理解しているところから始められる。

ミツコと話したいことが山ほどあった。何から話せばいいだろうか。

「そう言えば、前回の見積もりはどうなりました？」

まずはそんな疑問から投げかけてみる。

「確か月曜提出でしたよね。あれはどうでしたか？」

「はい、何とか間に合わせました」

「それはよかった。実は電話を切った後も、もしや仕事の邪魔をしたのではないかとずっと気掛かりだったのです」

「それは全然問題ないのですけれど、その後が良くないんです」

ミツコの不満が受話器を通して十分伝わってくる。

「どうかしたの？」

私はすかさず訊き返した。

「朝、見積もりを受け取るなり、上司は何て言ったと思います？
見当もつかなかった。計算でも間違っていたのだろうか。」

私が口も利けずにいると、ミツコは言葉を続けた。

「その物件は他社に決まったから、見積もりは必要なくなった、
ですって。」

「えっ、そうだったんですか？」

私は心底驚いた。何という仕打ちだろうか。それでは彼女があま
りにも可哀想だ。

「ホント、失礼しちゃいますよね。こっちは深夜までかかって仕
上げたというのに。」

確かに彼女の言う通りである。これでは労働意欲もそがれてしま
う。

「私の上司は、逆ホウレン草なんです。」

「えっ、何ですって？」

私は聞き慣れない言葉にそう反応した。

「ほら、ビジネスのホウレン草っていうのがあるじゃないですか。」

ああ、そのホウレン草か。

二人は声を合わせて、

「ホウこく、レンらく、ソウだん。」

と言った。

「そう、それなんです。上司はいつも社員にホウレン草を説いて
るくせに、自分こそ、私に報告せず、連絡せず、相談もしないんで
すから、逆ホウレン草という訳です。」

「逆ホウレン草か、そいつはいい。」

私は不覚にも声を立てて笑ってしまった。

「私、別のお野菜で上司を表現できますよ。月曜日の昼間にずっ
と考えていたんです。」

「別の野菜？」

「カボチャです、いいですか」

ミツコは少し間を置いて、

「かんがえることなく、ボさっとしているだけ、ちゃんと仕事しなさいよ」

そう一気に畳みかけた。

私は、涙が出るほど笑った。

上司への復讐としては、ささやかだが上出来である。そんな語呂合わせを、昼間に一生懸命考えていたと思うと、なお可笑しかった。そんな目に遭わされても、結局彼女は次の見積もりを引き受けているのではないか。

私は彼女に親近感が湧いた。

「でも、本当は私、そのことで上司を恨んではいませんよ」

ミツコはそんなふう言い出した。

「だって、あの日徹夜したおかげで、ヒロシさんと知り合えたのだから」

確かにそうである。もし上司が彼女に見積もりを頼まなかったら、二人が出会うことはなかっただろう。その意味では、カボチャ上司に感謝するべきなのか。

「あの晩、サッカーの選手たちと、ヒロシさんに元気の素を貰ったと思うんです。私も頑張ろうという気になりました」

「いや、僕の方こそ、君のことを思い出して、一週間仕事を続けられました」

それは本当の話だった。今の自分にとって、ミツコは大きな存在だった。

「ヒロシさんは、あの後、お仕事大変だったでしょう？」

ミツコが訊いた。

私は日曜日ヘルパーとして仕事に出た時の話をした。

ミツコは興味深そうに聞いていた。

「そう言えば、テレビはどうなりましたか？」

私は突然思い出して訊いた。

「あのままです」

「ずっと壊れたままなんですか？」

「はい、仕方がないので図書館で本を借りてきて、夜はそれを読んでいます」

「へえ、それはまた随分と生活が変わってしまいましたね」

「そうでもないんですよ、これでも私、学生時代は文学少女でしたから」

それは意外だった。自分の中で、積算課の女性と文芸とがどうにも重ならなかった。

「どうやら僕の持っているイメージとは違うみたいですね」

「えっ、それはどういう意味ですか？」

ミツコはこの点は譲れないとばかりに、勢い込んで訊いてきた。

「頭の回転が速くて、鋭い感じ。すらりと背が高く、黒縁のメガネを掛けている」

ミツコは思い切り笑い出した。

「それは全然違いますよ。数学は大の苦手。背は高くないし、メガネも掛けてません」

「それじゃ、もし君が目の前を通り過ぎても、気づかなかったかもね」

「何の話ですか？」

「店に出ている時、テレビ売り場に女性がやって来る度に、ミツコさんが来たんじゃないかと思っていました」

「それで、私は見つかりましたか？」

「いえ、見つかりませんでした。今思えば、まったく違うタイプの人を探していたことになりました」

ミツコは笑ってから、

「残念ながら私、お店には行きませんでした」と言った。

そうだ、ミツコはこの電話をどこから掛けているのだろうか。

「ミツコさんは日本のどの辺に住んでいるのですか？」
思わず私は訊いていた。

彼女は何かを言い掛けたようだったが、途中で止めてしまった。

「それは内緒。だってその方がロマンチックじゃないですか？」
そう言い出した。

「でも私の方は、ヒロシさんの住所を知ってますから、ちよつと不公平ですよな」

「えっ？」

自分の住所をミツコに教えた覚えはないのだが。

ミツコは含み笑いをして、

「だってこの携帯電話に、ヒロシさんの会社の番号が表示されますので、市外局番を調べれば、大体分かります」

「ああ、そうか。ここはそちらから遠いですか？」

「そうですね、ちよつと遠いと思います」

私は感慨が湧いた。

そんな離れた場所から、ミツコは自分に電話をくれている。

そんな遠くから、私を元気にしてくれているのだ。

私は受話器を強く握りしめた。

誰もいない深夜の事務所に、二人の会話だけが淀みなく流れていた。

ミツコは私の住んでいる場所の見当をつけていた。しかし私の方は、彼女の住所をまったく知らない。

彼女の言う通り、それは確かに「不公平」である。

「ミツコさんは、どんな街に住んでいるんですか？」

私は訊き方を変えてみた。

「平凡な街だと思えますよ。大都市でもなければ、極端な田舎でもない。ありふれた街でしょうね」

彼女はそう答えたが、私はミツコの住む街にひたすら興味が湧いた。

「海とか山とか、特徴的なものはありますか？」

「海なら、割と近くにありますがよ」

「ミツコさんは、そこで泳いだりするのですか？」

「いいえ、全然。学生時代プールで泳いだきりですね」

彼女のかすかな笑い声が受話器から伝わってくる。彼女は私との会話を楽しんでいる。そんな彼女の様子が、私の気分を明るくする。

「近くに観光地はありますか？」

「むむ、それはいいところを突いてますよ。結構、有名な観光地があります」

しかし彼女はそれ以上詳しく教えてくれなかった。確かに観光地の名前を言った途端、どこか分かってしまうだろう。

彼女の住む街は、海があつて観光地もある。

それはヒントのようで、ヒントではない。日本のどの街もそんな感じである。これでは彼女に迫っているとはとても言えない。

「やっぱりヒロシさんも気になりますか？」

ミツコは、ぼそりと言った。

「えっ、何が？」

私はそのわずかな言葉を聞き逃さなかった。自然とそんなふうになら返した。

「相手がどこの人だろうって。無性に知りたくなりますよね」

彼女は実に楽しそうに話す。自分は彼女とは昔からの親友のような気がしていた。

「実は私、電話を切った後、すぐに市外局番を調べてみたのです。ほら、電話帳の後ろに載っているでしょ？」

ミツコも私のことが気になっていたのだ。嬉しくなる。

「でも、距離なんてカンケイないですよ」

ミツコは続ける。

「近くにいっても疎遠な人だっている。逆に、あなたのように離れていても、とても親密に思える人もいるんですから」

その言葉に心が動いた。まったく同感だった。

「ミツコさん、会社に同世代の女性社員はいないのですか？」
私はそんなことを訊いてみた。

「小さな営業所ですからね。私の他にもう一人女性がいますけど、その方は私よりもずっと年上です」

「同じ積算課の方ですか？」

「いいえ、その人は完全な事務員さんで、積算課は私一人です」

ミツコは、昼はその人の指示で事務仕事をやらされている訳か。その合間に一人で見積りをしている。

私は孤独に働く女性の姿を想像した。電話口の明るいミツコとはどうにも重ならない。

「でも変ですよ。私一人しかいないのに、積算課だなんて」

「確かに大きさに聞こえますね」

大会社ほど、名目や所属だけはやたらと主張するものだ。しかし地方の営業所では、その区分けは実に曖昧で、他の仕事も兼務しなくてはならない。現に彼女も本来の仕事以外のことと忙殺されている。

「でも、手当は付くんでしょ？」

「私に、ですか？」

彼女は確認するように訊き返した。

「だって積算課で、特別な仕事をしているのだから」

「いえいえ、そんなのありません。ウチの会社は、営業は全員本社採用ですが、事務員は現地採用なんです。ですから給料体系も全然違うんです」

「へえ、そうなの？」

「社員にもランクがあつて、私は地元採用ですから営業さんとは別なんです」

大企業には、社員にそんな区分けがあるのか。それは知らなかった。

「だからお給料も全然違いますし、住宅手当も私にはありません。一人アパート住まいするのも、結構大変なんですよ」

いつしか彼女の悩みを聞いてやっている自分がいた。

不思議なことに、彼女の話は飽きることなく、いつまでも聞いていられそうな気がした。

「あら、もうこんな時間なんですね」

ミツコが突然そんな声を上げた。

私は反射的に時計を見た。一時半を回っていた。

「すみませんが、ヒロシさん、今日はこの辺で」

「分かりました」

私は素直に応じた。

「実は明日、結婚式なんです」

「えっ」

私は驚いた。

「結婚されるんですか？」

「いえいえ、私じゃありません。私の友人です」

なんだ、そうだったか。

冷静に考えれば分かることである。結婚式を明日に控えた新婦が、こんな遅くまで見積もりをしている筈がない。

結婚するのが彼女ではないと分かって、妙な安心感があった。この気持ちは何なのだろうか。

「それではヒロシさん、さようなら」

「さようなら、ミツコさん」

私は受話器を置いた。

今晩はあっさりとは終わってしまった。彼女に明日の予定があるのだから仕方がない。しかし私の身体は途端に寂しい気持ちに包まれていた。

彼女が突然会話を終わらせてしまった。そのため、こちらはどうすることもできなかったが、実は次いつ話せるか、彼女と相談しておこうと思っていたのだ。

電話の日時さえ決めておけば、お互いすれ違いをしなくて済む。

しかし彼女にとっては、この深夜の電話は、それほど積極的なも

のではないらしい。

実を言うと、今晚ミツコは携帯の番号を覚えてくれるのではないかと思っていた。しかし現実には、次の電話の取り決めすらしなかった。

所詮彼女は、仕事で溜まったストレスのはけ口として、電話を利用してに過ぎない。

でも、それでもいいのかもしれない。

ミツコが話したくなったら、電話を寄越せばよい。

その時をじっと待つことにしよう。

私は、椅子から立ち上がった。

第三部

4

あの晩を最後に、ミツコからの連絡は途絶えてしまった。

昼間の慌ただしい事務所の中で、私は一人で戦っていた。営業という仕事は、実に孤独なものである。手を差しのべてくれる同僚などいない。

仕事に一区切りつくと、決まって思い出すのはミツコの声であった。

机の卓上カレンダーを見つめる。

もうかれこれ二週間が経過していた。

毎週金曜日の夜になると、大した仕事もないのに、私は一人事務所に残って電話を待っていた。

しかし先週も、先々週もミツコからの連絡はなかった。

彼女は一体どうしてしまったのだろうか。

そんなことを考え始めると、息つく暇もなく、目の前の電話が鳴り出す。

昼間の事務所は、私を休ませてはくれない。

私は、誰よりも素早く受話器を取る。

(もしかやミツコからではないか?)

しかしそんな筈がないのであった。顧客からの電話である。

私は軽い落胆を覚えながらも、的確に処理していく。

やはり彼女は深夜にしか現れない。誰にも見られないように、密かにここまでやって来る。こんな明るい時間に現れる筈がない、かそれにしても、彼女は私との「ハウレン草」を守ってないではないか。そんな不満が頭をもたげて、つい笑ってしまった。

私たちはビジネスで繋がった間柄ではない。したがって報告、連絡、相談をする必要もない。

しかし、しかしである。

ミツコは確かに私のことをどこか頼りにしているようだった。私もそんな彼女の心をしっかりと受け止めていた。

彼女にとって、私はもう必要ではなくなったとでも言うのだろうか。

それは考えられないことではない。彼女の身の周りに、相談できる人物が現れたのかもしれない。例えば、頼りがいのある男性が身近にいるのなら、もはや私は用無しである。

彼女が最後に言った言葉が思い出された。

「明日は結婚式」か。

実は結婚するのは友達などではなく、ミツコ本人だったのではないか。今にして思えば、彼女はとっさに口からでまかせを言ったのではないだろうか。

それならもう彼女は私に電話してくることはないだろう。

私はそんなことを考えながら、ぼんやりと電話機を眺めた。

その日は、運悪く本社の視察と棚卸しが重なってしまった。そのため業務が終わったのは午前一時近くになった。

社員たちはみな、疲れた身体を引きずるようにして帰り支度を始めた。

もう何時間か後には、次の日の業務が始まっている。誰もが無口になるのも無理はない。最小限の挨拶を交わして、各自が事務所を後にした。

知らぬ間に、事務所に残されているのは、私と上司だけになった。彼は私に何か話があるようだった。明らかに他の社員がいなくなるのを待っていた。

「君は最近、頑張っているようだね」

彼はわざわざ私の机までやって来て、そんなことを言い出した。

「どうも」

私はそんなふうに応えたが、違和感を抱かずにはいらなかった。

このように、上司が人を褒めることは決してない。これには何か裏があるに違いない。それは何なのか、私はあれこれ思いを巡らせた。

「それで、折り入って話があるんだが」

そこまで言った途端、二人の間に置かれた電話が鳴り出した。

上司は驚いて、一瞬のけ反るような格好をした。

まさか!?

私が受話器に手を伸ばそうとした次の瞬間、それは先に上司の手の中に収まっていた。

「もしもし?」

彼はそんな短い言葉の中に、相手に精一杯の不快感を表していた。

「こんな時間に、一体どなたかね?」

さらに彼は語気を強めた。相手を端から信じていない乱暴な言葉遣いだっただ。

私には、その電話の主が誰だか分かっていた。実にタイミングの悪い電話をしてくるものだ、と思った。

「君の名前って、ヒロシだったかい?」

上司は電話を保留にせず、私に問いかけた。

「それは私のあだ名です」

「そうか。相手はミツコと名乗っているが」

思った通りである。やっと来たか、と心の中は嬉しくなる。

しかしそれを上司に悟られないように、無表情のまま、

「彼女は高校の同級生です。今度同窓会をやるので、その打ち合わせの電話です」

と口から出まかせを言った。

「そうか」

彼は、受話器を私に突き出した。もう疑ってはいないようだった。と言うよりこの電話には興味がなくなった様子だった。

「もしもし?」

「こんばんは、ミツコですけど」

久しぶりに聞く声だった。心に安堵が広がる一方で、上司を先に
出してしまったことが悔やまれた。

「ヒロシです、お久しぶり」

私は上司の顔を伺いながら、平静を装って言った。

「ごめんなさい、まだ事務所に他の人が残っていたんですね」

電話の向こうで、ミツコが恐縮しているのが分かる。

「いえいえ、別にいいんですよ」

上司はしばらくそんな私たちのやり取りを聞いていたが、

「それじゃ、私は先に帰るよ。後は頼む」

と手を挙げて出て行った。

私は軽く会釈をしてから、椅子に腰掛けた。

上司の姿がなくなると、事務所は途端に静かになった。重圧から
解放されたような気分になった。

「ヒロシさん、ごめんなさい。また掛け直します」

ミツコが言う。

「いやいや、大丈夫です。もう私一人ですから」

「そうなんですか？」

「今のは、ウチの上司です。失礼な言葉遣いですみませんでした」

「それは構いませんが、ヒロシさん、怒られたりしませんでした
か？」

ミツコは心配そうに訊いた。

「大丈夫ですよ」

私はわざと笑ってみせた。

「それならいいのですが。でも、ちょっとビックリしちゃいまし
た。まさかヒロシさん以外の人が出るとは思ってもみなかったので」

確かにミツコはこの会社の名前も、私の本名も知らないのだ。さ
つきはさぞ困ったことだろう。

そんなことよりも、私はミツコの声が聞いて嬉しかった。

彼女は以前と変わっていなかった。私の心を覆っていた暗雲はす
っかり消えていた。

「それにしても、お久しぶりですね」

私はまた同じような台詞を口にした。嬉しさが隠せなかった。ミツコは私のことを忘れてはいなかったのだ。

「ヒロシさん、今日は何かいいい事でもあったのですか？」

彼女には、電話の向こうから私の表情が見えているようだった。

「いえ、別に」

「でも、何だかとっても嬉しそう」

ミツコの羨ましそうな声が、受話器から伝わる。

彼女は、私の気持ちとは裏腹に、どこか重苦しい雰囲気を引きずっているように思われた。

「遅くまで、お仕事ご苦労さん」

私はミツコにそんな言葉を掛けた。

不思議と自分の疲れが消えていくような感覚があった。朝からずっと働き詰めで、身体はぼろぼろの筈なのに、こうしてミツコと向き合っているとそれも癒される。

私は少し躊躇したが、やはりこれだけは言わずにはいられなかった。

「正直、淋しかったですよ、私のことをすっかり忘れてしまったのではないか、と思ってました」

ミツコは一瞬言葉に詰まったようだった。どう返事をすればよいか、迷っているようだった。

彼女の反応に私は焦った。何かマズいことを言ったのだろうか。自分の言葉を頭の中で繰り返し返した。ミツコは何か勘違いして、不快な気持ちになっていないか心配になった。

私に他意はなかった。自分の正直な気持ちを伝えたかっただけである。私はすぐに言葉を変えて、会話を立て直した。

「最近、お仕事の方は暇だったのですか？」

「えっ、どうしてですか？」

ミツコは今度はすぐに反応した。

「だって電話がなかったということ、残業もなかったということ」

とでしょう?」

「いえ、違うんです。週末は連続して、見積もりの研修会で出張してました」

「へえ、そうなんですか」

私は驚いた。

「しかも泊まりで」

そう言うと、ミツコは小さくため息を漏らした。どうやら嫌なことを思い出させてしまったらしい。

「でも事務所を離れて、いい気分転換になるんじゃないですか?」

私は力ボチャ上司のことを思い出していた。出張の間は、彼の顔を見なくて済むではないか。

「それが全然なんです。出張先では、ユウウツな気分になりました」

「と言うと?」

「各営業所から積算課の女子社員が、研修センターに集められるんです。そこで朝から晩まで缶詰です」

「見積もりの練習ですか?」

「まあ、そんなところですね。新しい建材が次々に出てきますので、それに合わせて積算方法も変わるのです。そのための勉強会です」

「結構、大変なんですね」

私は心の底からそう言った。

私たちはもう学生ではない。実際に仕事に就いている社会人である。そんな人間が、日頃の業務を抱えながら、新しい勉強に時間を割くのは大変なことである。

やはり大企業は、それだけ社員教育に力を入れているということか。

「いえいえ、その勉強会はそんなに辛いものではないんです」

ミツコは、私が勝手に勘違いしていると思ったのか、そんなことを言った。

「私たちは、今回地方から集められたのですが、元々、都市部で働いている女子社員も居るんです」

「はい」

一体何の話が始まったのか、私はただ黙って聞くしかなかった。

「そんな彼女たちは、私と年齢がほとんど変わらない筈なのに、とても輝いて見えるんです。それがちょっと悔しくて」

私にはその意味がよく分からなかった。都会の女性は綺麗ということか。

ミツコはそんな私に構わず、話を続けている。

「都会の営業所では、地方とは違って部署がきちんと別れていて、積算に没頭できるのです。余計なことがない分だけ、スマートに仕事をこなせます。だから当然、仕事も速い。もちろん仕事のできる子を配置しているからでしょうけど」

なるほど、読めてきた。どうやらミツコは都会の女子社員の環境が羨ましい、と言いたいらしい。

敢えて私は口を挟まず、聞き役に徹した。

「彼女たちとセンターで一緒に勉強するんですけど、何と云うか、彼女たちは自信たっぷりに見えるんです。私なんか、田舎から慣れない場所にやって来て、それだけで気後れしているというのに。彼女たちは、おしゃれに制服を着こなして、休み時間に、別の部署の男性社員と仲良く話しているんです。まるで私に見せつけているようでした。私、平静を装っていましたが、自分がとてもちっぽけに思えてきて」

ミツコは一気に話すと、最後に付け足した。

「ヒロシさんには、この気持ち、分かりますか？」

今度は、私が言葉に詰まる番だった。

深夜の事務所は、実は無音ではないことに今気がついた。

廊下に設置されたジュースの自動販売機が、低いモーター音を立てている。

社員がみんな帰ってからも、朝まで仕事をしているのだな、と考
えた。

ミツコの方は私の返答を待っていた。それまでは言葉を発しない
つもりらしい。

「ミツコさんは、ちっぽけな女性じゃないですよ」

私には気の利いた言葉は浮かばなかった。ただそうやって、思っ
たままを口にした。

「ヒロシさんは、優しい人ですね」

ミツコは短く言った。それは感情の一かけらも入っていない言い
方だった。

「でも、気休めはおっしやらないで下さい」

そう、ぴしゃりと言った。

今夜のミツコはいつもと違っていた。まるで私に挑戦してくるか
のようだった。それなら私も本音でぶつかろうという気になる。

「別にそんなつもりで言ったわけじゃない」

「でも、ヒロシさんは、私がどんな女か知らない筈ですよ。私た
ちは顔も合わせたことがないのですから」

なるほど、それは確かに彼女の言う通りである。

私たちは、深夜に電話で話すだけの間柄である。顔も本名も知ら
なければ、ましてや性格など理解している筈もない。それは事実だ。
しかしなぜかミツコのごとは昔からよく知っているような気がする
のだ。

まるで家族のように、肩肘張らずに自然体でいられる。仕事で汚
れた心が、彼女と話すうちに、浄化されていく。

「うまく言えないけれど、ミツコさんはもっと自信を持っていい
と思う。正直、夜の見積もりに疲れたミツコさんしか知らないけれ
ど、おそらく昼間は、みんなから頼りにされている存在なのだと思
う」

ミツコは黙って聞いている。

「前に聞いた年上の事務の女性も、カボチャ上司も、君を信頼し

ているからこそ、仕事を頼んでいるんじゃないのかな。それをきばきこなしている君は、きつと輝いて見える筈だよ」

「そうでしょうか？」

「ボクはそう思うよ。それに…」

「それに？」

ミツコは思わずつられて、そんな声を出した。

「ボクも、君のことを頼りにしているんだ」

「えっ？」

「君と話していると、心が軽くなるんだ。どれだけ仕事に疲れていても、明日の活力が湧いてくる。また、君に負けないように頑張ろう、ってね」

ミツコは電話の向こうで、涙をすすめるような音を立てた。

「だから他人と比べてあれこれ悩むよりも、もっと自分を中心に考えて、自信を持てばいい、と思うんだ」

私から見ても君は輝いている、と付け足そうと思ったが、それは言わなかった。

「分かりました、ありがとうございます」

最後はミツコは素直だった。私の意見をしっかりと受け止めているようだった。

私は営業という仕事を通して、これまで多くの人と接してきた。だから話をするだけでも、相手がどんな人物か、ある程度の見当は付けられる。

ミツコに言ったことは、決して嘘ではない。私にとってミツコは素敵な女性である。それは今までの会話から十分に感じ取っていた。

「もっと早く、ヒロシさんに電話すればよかったかも」

「えっ？」

「実は私、研修センターの宿舎で、一人ベッドに横になって、最初に思い浮かんだのは、あなたのことだったの」

その言葉は、私の心を大きく揺さぶった。

いつしか背中に羽根が生えたようだった。身体が軽く感じる。今

にも空に浮かび上がってしまいそうな感覚があった。

「そこで電話してくればよかったのに」

私は残念そうに言った。

もしその晩、電話を取っていれば、彼女の心の迷いを、すっかり取り去ってやることができたかもしれない。

「でも、出張疲れで早々と寝ましたから、深夜ではなかったのです」

「別にいつだって構いません。話したい時はいつでもどうぞ」

「ありがとうございます。でも、こちらが残業していない分、何だか気が引けますね。ヒロシさんの方は、お仕事なのだから」

そんな細かいことにミツコは拘っていた。いや、根が真面目なのだろう。

「いえいえ、全然平気ですよ。ボクは日頃、ミツコさんから勇気づけられているから、そのお返しに、いつでもお役に立てればいいと思つてます」

「分かりました。では今度何かあったら、真っ先に電話しますね」
ミツコは嬉しそうに言った。

私もそんな彼女の弾んだ声が、とても嬉しかった。

第四部

5

あれから数週間が経っていた。

朝、テレビをつけると、西日本の梅雨明けを知らせるニュースが映し出された。

ミツコの住む街は、どうなのだろうか。

今度電話で聞いてみよう。案外そんな話題から、彼女の住所が判明するかもしれない。

ミツコは二週に渡って、金曜日の深夜、電話を寄こしていた。

彼女は話の好きな女性である。毎回、実に多くのことを語ってくれる。

それは生活の中のささやかな喜びであったり、また時には仕事の愚痴だったりもする。

そんな時、私はいつも聞き役に徹するのだった。話の内容が、たとえ他愛のないものだとしても、彼女の声が私に元気を与えていることに違いはない。

もうミツコのいない生活は考えられなくなっていた。

「今晚、空いているかい？」

終業時刻になると同時に、いつの間にか上司が傍に来ていた。

そんな彼の言葉に戸惑いを覚えながらも、

「はい、大丈夫です」

と私は答えた。

「ちよつと付き合っしてほしいんだ」

彼は指と指を合わせて、それを口に運ぶ仕草をする。どうやら一杯やるうというお誘いらしい。

周りの社員は、そんな私たちの横をすり抜けて、挨拶だけ残して

次々と事務所から去っていった。

思えば、上司が私一人を誘うのは、これまで一度もないことだった。

二人はタクシーで、夜の繁華街に繰り出した。

私はあまり酒の強い方ではない。酒の席では、いつも時間を持て余してしまう。周りがどれだけ盛り上がっていても、酔えない自分はいつも冷静でいられるのだ。そんな時は決まって早く帰ることだけを願っている。

今夜もできるだけ早く解放してもらいたい、そんなことばかりを車内で考えていた。

駅前の大きな居酒屋に入った。

平日の夜だけに客の姿はまばらだった。店員の威勢の良い掛け声が、むなしく響き渡った。

私たちはひっそりとした奥のテーブルを陣取った。

まずはビールで乾杯する。

「お疲れさん」

上司からそんな言葉が出た。彼の雰囲気はどこかいつもと違っていた。部下に対する優しさを感じるのだ。どういふ風の吹き回しだろうか。

彼が一気にグラスを空けたので、私はすかさず酌した。

「君は気が利くね」

彼はそんなふう私を褒めた。まるで私に負い目でもあるような調子だった。

私は私生活について色々と尋ねられた。

私が話し終わらないうちに、

「若い人も大変だね」

などと彼には不釣り合いな言葉を挟んだ。

随分と時間が経っていた。しかしどれだけ話し込んでも、仕事のこととは不思議と話題に上らなかつた。

上司は随分と酔ってきたようだった。その証拠に目の縁が赤く染

まっている。

私の方は、ゆっくりとしたペースで、しかも口を湿らせる程度なので、意識ははっきりとしていた。これなら店に入る前とほとんど変わっていなかった。

上司は急に黙り込んだ。

テーブルの料理はほとんど平らげてしまつて、二人は互いを見つめ合う格好となつた。

「実はね、今日は君に言わなければならぬことがあつてね」
彼はそんなふうに切り出した。

「はい」

私はひどく悪い予感に襲われた。

会社の中では、私が一番の若手である。もし社員に何か不都合を強いるとなれば、私が最先鋒となることは間違いない。

「実は、少し前から決まっていたんだが」

彼は私とは視線を合わせなかった。私の顔を真つ直ぐ見られないようだった。

「すまないが、会社を辞めてもらうことになつたんだ」

語尾がよく聞き取れなかった。彼の声は震えていた。

私は凝り固まつて、声も出せなかった。

「もつと早く君に言つつもりだったんだ。ほら、先月の棚卸しの日だよ。夜中に君に電話が掛かつてきたらどう？」

すっかり思い出した。上司がいるところにミツコから電話があつた。

そう言えばあの時、彼は私に何かを言おうとしていたようだった。そこへミツコが割り込んできたのだ。

なるほど、そうだったか。

あの夜、私は落ち込んでいたミツコを励ましてやったのだが、呑気にそんなことをしている場合ではなかったのだ。あの時すでに私の人生は大きく向きを変えようとしていたのである。

客のほとんどいない、がらんとした居酒屋で、時間だけが静かに

過ぎていった。

不思議と怒りや悲しみは湧いてこなかった。

頭の中は真っ白で、延々と続く上司の話は耳に入っていないかった。これが世間で騒がれているリストラなのか。今までマスコミが大げさに騒いでいるだけの作り話だと思っていた。いや、どこか遠い世界の話だった。それが自分の身に降りかかってくるとは、これっぽっちも考えていなかった。

解雇の通達が、これほど日常の延長線で、しかも極めて自然に行われることに感心させられた。当事者にとっては人生を大きく左右することであっても、会社にとっては別段大したことではないらしい。

「すまない」

と言う上司の言葉がやっと耳に届いた。

「来月一杯なんだ」

私の頭は何も受け付けようとはしなかった。その言葉の意味を生懸命に考えた。

突然、ミツコの声が浮かんた。この瞬間、彼女に負けた気がした。いや、元々彼女に勝てないことは分かっていたのだ。

いつだったか、ミツコは輝いてる、そう彼女に言った。今にして思えば、笑止千万である。自分は輝くどころか、彼女と同じ土俵にすら立っていない。

私は会社を去ることになった。もうあの事務所でミツコを待つことはできない。深夜、彼女の話に付き合っただけでやることはできなくなった。

彼女にどう説明すればよいだろうか。そんな思いが頭を渦巻いていた。

居酒屋の前で上司と別れ、私は一人タクシーに乗っていた。タクシー代は彼から貰っていた。

今夜はすっかり酔いたい気分だった。しかし悲しいことに、私は

酔えるほど酒を飲むことができないのだ。

私は大人しく、後部座席に身を沈めて、流れゆく夜の景色を眺めていた。

外はネオンの洪水だった。その店の数だけ働く者がいる。そしてその店に群がる者もまた、どこか別の場所で働く者たちである。

これまで労働者としての自分に何の疑いも持たなかった。朝起きれば、自然と会社に足が向いていた。文句を言いながらも日々の仕事を片付けていた。

働くということは、一体どんな意味があるのだろうか。

タクシーの運転手が羨ましくなった。彼は悩む暇もなく、生き生きとハンドルをさばっている。

今の私の心境は、決して彼には理解できないだろう。

始めからやり直した、と思った。

私はこれまで築き上げてきた、信頼や自信を一気に失った。

ミツコと再び対等に話せるようになるには、果てしない時間が必要に思われた。彼女に対して、今は敗北感しか湧いてこなかった。

タクシーを降りた。

そこには明かりの消えた会社が、まるで壁のように立ちはだかつていた。

不思議な気分だった。夕方ここを出た時と今とでは、まるで天地ほどの隔たりがある。本当に自分は、数時間前と同一人物なのだろうか。

鍵を開けて事務所に入る。

明かりもつけず、自分の机まで歩いていった。

真っ暗に思えた空間も、月明かりがほのかに差し込んでいるのが分かる。目が慣れると、歩くにはこれで十分である。

腰を下ろす。スチールの椅子が乱暴な音を立てた。

机の上では、電話機がその存在を主張していた。

反射的に腕時計を見た。十一時を過ぎたばかりである。

受話器を見つめっていると、ミツコの声が聞こえてきそうだった。今晚、彼女は電話を掛けるつもりだろうか。

これまでは、ミツコからの電話が待ち遠しくて仕方なかった。しかし今は違う。

正直、ミツコとは話したくない。自分がここを去ることは、いずれ打ち明けなければならないだろう。しかしそれは今晚やるべきことではない。まずは自分の気持ちを整理することが先決だ。

電話機は、今すぐにも鳴り出す予感がする。

私は怖くなった。

もし本当に鳴り出したらどうしようか。いや、無理に応答する必要はない。そう心に言い聞かせて、絶対に出ないことに決めた。

しかしいつかはミツコに真実を伝えなければならない。

私がこの会社を辞めるなら、彼女はここへ電話を掛けてくる意味がない。

それは即ちミツコとの別れを意味していた。

彼女が真実を知ったら、私を軽蔑するだろうか。それとも同情して、励ましの言葉でも掛けてくれるだろうか。

いずれにせよ、ミツコとは今まで通りに話ができなくなった。それだけは間違いない。

私はしばらく放心していた。

電話が怖いなら、さっさと帰ればよいものを、敢えてそうしなかった。実は心のどこかで、ミツコの電話を待っているのではないのか。

こんな時だからこそ、彼女に傍にいてほしいのだ。情けない自分を笑い飛ばしてほしいのだ。

どれくらい時間が経ったのだろうか。

表の蛍光灯に群がる虫の羽音が聞こえていた。

どうやら今夜はミツコからの電話はないようだ。

心の中は、安堵の気持ちと寂しい気持ちとが同居していた。

もし電話のベルが鳴ったなら、私はすぐに受話器を上げて、今の

気持ちを包み隠さず話しただろう。

ミツコはきつと分かってくれる、そんな気がした。

その晩、アパートに帰ってきて、ベッドに横になったところで一睡もできなかった。

考えるべきことがいくらでもあった。

まずは両親には何と説明しようか。初老を迎えた二人を驚かせないようするには、慎重に言葉を選ばなければならない。

また友人に対しても対策が必要である。必要以上に気を遣われるのが最も辛い。余計な心配を掛けないように話を作り替えるのもやむを得ない。

それに興味本位であれこれと詮索されるのも困る。一々それに応じていては、その都度精神が削られていきそうだ。こちらの身がいくつあっても足りない。

いずれにせよ、みんなが騒ぎ出さない程度のストーリーは用意せねばなるまい。

そこは営業マンとして、何とか言いくるめる自信はある。

目を閉じると、ミツコの声が聞こえてきた。それはいつまでも耳から離れなかった。

ミツコにはどう言えばよいだろうか。彼女に対して嘘はつきたくない。あくまで本音でぶつかりたい。

やはり今すぐにも、ミツコと話をしなければならぬ、そんな気がする。

私自身、まだ気持ちの整理がつかないというのに、言葉の準備もできていないというのに、何と言えばよいのか。

私は自問自答する。

ミツコには解雇されたことをしばらく伏せておこうと思う反面、やはり正直に打ち明けたいと思う。安っぽいプライドなどさっさと捨てて、彼女に全てを聞いてもらえたら、どんなに気が楽だろう。私はこれまで、ミツコが私を必要としているのだと思い込んでい

た。孤独で行き場のない彼女は、深夜になると私を頼ってくるのだ、
そう決めつけていた。

彼女の電話番号を知らなくても何も困ることはなかった。なぜなら電話を必要としているのは、いつも彼女の方なのだ。

私は堂々と構えていればよかった。ミツコが私を訪ねてきたら、
広い心で彼女を包み込めばよい。それが私の役目だった。

それが今はどうだろう。

私はいとも簡単にその立場を追われてしまった。

もはや彼女を助ける側ではない。助けられる側である。次の電話
で、彼女はひどく失望することだろう。しかし今の私にはどうする
こともできない。

私に彼女を支える力は、もう残されていないのだ。

そう、今回ばかりは彼女に支えてもらいたい。彼女の口から、叱
咤激励が聞きたいのだ。

次の朝、私は複雑な気分で会社に向かった。

地に足が付かないとは、まさにこのことだった。昨日の晩の出来
事を信じることができないのだ。それほどいつもと変らぬ朝なのだ
った。実は悪い夢でも見ているのではないか、と本気で考える。

解雇されるのは、私一人なのだろうか。

私は自分の席について、事務所の中を見回してみた。

いつもの忙しい朝を迎えていた。誰もが何の迷いもなく、仕事を
始める。

そんな中、私の心の異変に気づく者などいなかった。私が解雇さ
れることは、誰にも知らされていないようだ。今はまだ箝口令が敷
かれているのだろうか。

私はどんな表情を浮かべてよいか分からずに、今日の仕事の予定
を確認する。

しかしこんな不安定な気持ちのまま、残りの一ヶ月をどう過ごせ
ていようのだろうか。

会社を辞めるからといって、手を抜こうとは思わない。少しでもそんな素振りを見せようものなら、それだから解雇されたのだと、みんなを納得させてしまっただろう。

ここは一つ、この解雇が不条理なものだとみんなに思わせたい。そのためには、私に残された道はただ一つ。これまで以上の働きを見せて、私を手放すことが誤った判断だったと会社に思わせることだ。

そう、この会社に後悔させてやる。

机の電話が鳴った。

私は誰よりも早く受話器を取り上げる。

ミツコからの電話も、こんなふうに応じることが出来るだろうか。

第五部

6

私の日々の生活は、表面上何も変わることはなかった。仕事場において、同僚たちは何も知らされていないのか、私に接する態度は今まで通りだった。

本当に私はこの会社を出ていくのか。誰か止める者はいないのか。誰にも届くことのない魂の叫びだけが、空しく事務所にこだまする。

正直、今でも信じられない気分だった。

週末が近づいてきた。

最近ミツコは、金曜日の深夜に決まって電話を掛けてくる。

その時が刻一刻と近づいている。逃げ出したくなる衝動にかられる。身体が飲み込まれてしまいそんな恐怖を感じる。

じわじわと追い詰められて、行き場を失った逃亡者のようだ。ぐずぐずしていると、本当に恐怖に支配されそうだ。もはや自分に都合のよい隠れ家などない。

いっその事、ここは開き直って、堂々とミツコと向かい合ってはどうかだろうか。

しかし、そんな勇氣は自分にはないのである。元来、私は弱い人間なのだ。それに今、ミツコと対峙するだけの武器を何一つ持っていない。素手で戦うも同然なのである。これでは、負けるのは目に見えている。

ミツコはこれまで私を頼ってきた。その私が、実は見掛け倒しの取るに足らない存在と分かった時、彼女はどう思うだろうか。

おそらく愛想を尽かすに違いない。もう二度と電話をしてくることはないだろう。

それはミツコとの別れを意味する。

しかし、それでもいいのかもしれない、そう私は思い直した。

もはや私は彼女と対等の関係ではない。何事もなかったように、お互い別々の道を歩き出すのも当然の帰結と思われた。

ミツコ。名前も顔も知らない女性。

このまま別れることになっても、何のためらいもないではないか。そうである。例えば彼女にどう思われようと、私が頭を悩ます必要がどこにあるというのか。

ミツコは単なる通りすがりの女性である。偶然、袖が触れ合ったに過ぎない。

目の前にお茶が出された。

事務所での昼下がりがだった。女性事務員が一人ひとりの席を回って、一番最後に私の所へやって来たのだった。

「お客様からの頂き物です」

そう言って、丁寧に包装された和菓子を一つ置いた。

「ありがとうございます」

私はかしまって、深く頭を下げた。

彼女は少し笑って、奥に消えていった。

いつしかこの会社に初めてやって来た日のことを思い出していた。何をするにも、周りの目が気になっていた。常に不安がつきまわっていた。

周りから見れば、まさに借りてきた猫のようだっただろう。

あの日と同じ気分だった。まもなくここは、私の居場所ではなくなる。感傷的な気持ちが湧いた。

今頃ミツコも昼休みを迎えているだろう。のんびりお茶でも飲んで、女子社員と話に花を咲かせているだろうか。それとも休む間もなく、次の見積りに取り掛かっているのだろうか。

電話が鳴った。すかさず事務員が応対する。私はそんなやり取りを遠くに聞いていた。

本当にミツコは通りすがりの女性なのだろうか。

彼女は不思議な女性だった。つい最近出会ったばかりなのに、昔から彼女を知っていた気がする。まるでついこの間まで一緒にいた友人が、ちよつとどこかへ引越して、電話で近況を報告しているような感じなのだ。

そう、彼女のことを私はよく知っている。今はたまたま離れ離れでいるけれど、またいつか再会できる日を待っている。

果たしてそんな大切な人を簡単に手放していいのだろうか。私にとってミツコは友達も同然なのである。

やはり彼女に嫌われないように、自分を飾りたいと思う。最後の力を振り絞って、彼女の前では格好良くありたいと思う。

今はまだ、彼女と話のできる状態でないだけだ。こちらの姿勢を立て直すことが先決だ。

少し時間の猶予さえあればよい。時が自信を回復してくれる。そんなふうに結論を出した。

そうして、ついに金曜日の夕方を迎えていた。

私は激しく迷っていた。今夜はどうしようか。

意を決して、席を立った。

この場所に居なければ、電話のベルを聞かなくて済む。ミツコと向き合わなくても済む。

私は逃げ出すように、事務所を後にした。

アパートで一人考えた。

これまで、ミツコの電話が何よりも嬉しかった。彼女と共有できる時間こそが、心に安らぎを与えていた。

ところが今はどうだろう。見えない不安が日々増幅し、身体を押し潰すまでになっている。

彼女からの電話が怖い。

会社を解雇されたという、たった一つの事実が人の心をこれほど変えてしまうものなのか。

週明けは、いつもと変わらぬ仕事待ち受けていた。気持ち安定しないまま、時だけが無情に流れていく。私がこの事務所に居られるのも、いよいよ一ヶ月足らずとなった。足が地に着かない感覚が、いよいよ私を支配し始めていた。どんな仕事もまるで偽善のように思われる。この会社内に自分の存在意義を探そうにも、それはどこにもありはしない。私はそんな思いを、一人抱え込んでいた。

ある平日の昼、私は自分の机で弁当を広げていた。今事務所には、営業社員が数人、食事に戻ってきていた。斜め後ろの席で、先輩二人が話し込んでいる。

「昨日の晩、変な電話が掛かってきたんだ」

私は雷に打たれたかのように、身体を硬直させた。全身の血液が凍りついたようだった。

「変な電話？」

相手がすかさず声を上げた。

「昨夜は会議の資料作りで残業してたんだよ。そしたら十二時半頃だったかな、電話が掛かってきてさ」

私は身体全体が耳になっていた。一言も聞き漏らさないよう、神経を集中させた。

「そんな時間に誰から？」

「若い女の声で、間違えました、って」

「そのどこが変なんだ？ ただの間違い電話だったんだろ？」

「いや、それが違うんだ。夜遅い電話だったから、会社名も名乗らずに、もしもし、って言ったただけなんだ」

相手は黙って聞いている。

「それなのにその女はいきなり、間違えましたって言うんだ。おかしいだろう？」

相手はしばらく考えているようだった。

そして、

「確かにそうかもな」と言った。

ミツコに間違いなかった。彼女は私でないことを一瞬で判別したのだ。

彼女と私にとっては普通の電話も、他人からすれば、それは奇妙なものだと言わざるを得ない。これは会社の事務所深夜に行われている、いわば密会である。お互いにそんな背徳感がすっかり薄れていた。

確かに名前も名乗らないのに、間違いもあつたものではない。先輩の言う通りである。

二人の話はまだ続いていた。

「そうだろう？ 『もしもし』だけで、どうして間違いだと判断できるんだ？」

相手はじつと黙り込んで、この謎を解明しようと考えを巡らせているようだった。

そして次のように言った。

「案外、そんなに変ではないかもしれんぞ。例えば女に電話を掛けたつもりで、お前みたいのが出てきたら、すぐに間違いだと気づくだろう」

「なるほど、確かにそうかもしれないな。だが、この電話はそれだけで終わらないんだよ」

「えっ？」

相手は知らずそんな声を上げた。

私も身構える。

「三十分ほど経ったら、また掛かってきたんだ」

「同じ女からか？」

「そうなんだ。今度もまた、間違えたって言うんだぜ」

「そりゃ、変だ。何かの嫌がらせじゃないのか？」

「いや、別に悪意は感じられないんだが、何だか怖くなってさ」

「電話はそれで終わりか？」

「俺はそこで仕事を切り上げて帰っちまったから、その後のことは知らない。だが、ちょっと気になってこれを仕掛けておいたんだ」
私は思わず声の方を振り返った。

彼の手には、銀色に輝くマッチ箱のような物が握られていた。

「何だい、それ？」

「ボイスレコーダーだよ。音が鳴ると、自動的に録音が始まる」

「へえ、それでまた電話は掛かってきたのか？」

「さつき確かめたら、入ってたよ。あの後、午前二時、三時、三時半、四時、五時半、六時と六回掛かってきた」

「まさか、嘘だろ」

「いや、本当だ。証拠ならここにある。もちろん電話を取る者は誰もいないから、ベルが数回鳴っては切れる、の繰り返しだけど」

「おそろく同じ女からだろうな」

相手は自信あり気にそう言った。

私は思わず立ち上がった。

「すみません、それは私の知り合いです」

二人の目が点になっていた。

「お前の知り合い？」

「はい、実は昨日電話を掛けてくる約束があったのですが、私がつっかり忘れてしまって。それは、同窓会の打ち合わせなのです」
私はいつか上司に言ったのと同じことを言った。

ミツコが変人扱いされることが、どうにも我慢ならなかった。

彼女は立派な女性である。私を含めて、この三人と比べても、決して引けを取らない。

先輩二人は、ぼかんと口を開けたままだった。

しばらくして、

「そうか、お前の知り合いか。それなら、いいんだけど」

私の下手な嘘に、一応納得してくれたようだった。

私は椅子に座り直して考えた。

ミツコがそれだけ連続で電話を掛けてきたことに、確かに違和感を覚える。

私が出なかつたとは言え、少々異常ではないか。

まさか私が金曜日に、彼女の相手をしてやらなかつた腹いせという訳でもあるまい。

そもそも昨日は平日である。

朝まで電話を掛け続けたということは、彼女は完全に徹夜をしたことになる。平日に徹夜などして、今日は大丈夫なのだろうか。

私は彼女のことを心配になってきた。

それとも昨夜は大がかりな見積もりでも任されていたのだろうか。しかし、それもまた変なのである。

大事な見積もりがあるのなら、そんなに頻繁に電話を掛けてくる余裕などない筈だ。

やはりこれは、仕事の延長などではない。

彼女に何か緊急事態が発生したのではないか。

午前三時に誰も出なければ、四時や五時に掛けても結果は同じだろう。それが分からぬほど彼女は馬鹿ではない。

とするならば、彼女は余程理性を失っていたことになる。

ミツコは、とにかく私と話がしたかった。それが無理だと分かっていたても、何度も何度も私に呼びかけていたのである。

やはり彼女の身に何かが起こったのだ。

私は居ても立ってもいられなくなった。

今のところ、彼女が頼れる人物は私しかない。それに私は応えることができなかつた。

(ミツコに一体何があつたんだ?)

それから私は一切仕事に手がつかなくなつた。

第六部

7

気がつけば、終業時刻を迎えていた。

私は思い出したように、机の書類を片付け始めた。

女子社員らは、いつの間にか私服姿に戻って、

「お先に失礼します」

と、揃って事務所を出て行った。

私には残つてするほどの仕事は見当たらなかった。上司も気を遣つているのか、あの日以来、私に大きな仕事を任せなくなっていた。今夜はこの事務所で、ミツコの電話を受けようと思う。もはやそれは私の義務だった。今の私には、それがまさしく残業と言つてもよかつた。

ミツコが私を頼ってきているのだ。そんな彼女をしっかりと受け止めてやらなければならない。

私は一旦、何食わぬ顔で退社してアパートに戻ってきた。

食事と風呂を済ませてから、しばらく自室で時間を潰した。

そして夜十一時を回る頃、再び会社に出向いたのだった。

事務所に他に社員が残っていたらどうしようか、と考えていたのだが、駐車場から見ると事務所は真つ暗だった。

こちらの条件は整つたように思われた。

今晩は誰にも邪魔されずに、ミツコの話に付き合うことができそうだ。私はひと安心した。

事務所の鍵を開けて中に入る。敢えて電気は点けなかった。

こんな暗闇の中でも、すぐに目が慣れてくる。私は迷うことなく室内を歩いていった。

廊下では、ジュースの自動販売機が眩しいばかりの光を放つてい

た。その明かりに誘引されるように、私は缶コーヒーを一本買った。取出し口から爆発音を思わせるほどの大きな音が響き渡った。

私は誰かが飛んできやしないかと、慌てて左右を見回した。昼間の先輩の話で、ミツコとの密会に多少の後ろめたさを感じているのかもしれない。

しかし誰もいない事務所は、何事もなかったかのように、静寂さを取り戻している。

私は次第に不思議な気分になっていた。

この会社に勤めてまだ三年足らずだが、これほど何度も、深夜まで事務所に残ることはなかった。

辞める間際になってから、会社に長居するようになった自分が滑稽に思われた。

これこそ最大の皮肉である。そんな話をしたら、ミツコはどう応えるだろうか。いつものように笑ってくれるだろうか。

窓から差し込む月明かりが、事務所内のあらゆる物を青白く浮かび上がらせている。

私は缶コーヒーを片手に、椅子に腰掛けた。

時計を見ると、今ようやく十一時半になったところだった。

少々早く来すぎたようだ。

これまでミツコは十二時を過ぎるまでは、電話を掛けてくることはなかった。

日付が変われば、安心して電話ができる時間帯だと考えているらしかった。

果たして今夜、ミツコは電話をくれるだろうか。

昨夜、何度もこの事務所の電話を鳴らしたことを考えると、彼女は是が非でも私と話がしたかったことは想像に難くない。そういうことなら、今夜も確実に掛けてくる筈だ。

しかし一方で、違うことも考えられる。

人は本来の目的を達成せずとも、その過程に充足感を見出してしまふことがある。実はそれは、思い通りにならない悲しい自分を慰

めていることに他ならない。

ミツコも昨夜電話のベルを何度も鳴らすうちに、自分を悲劇のヒロインに見立てて、とりあえずの満足を得てしまったかもしれない。そうであるならば、今夜は睡眠不足と相まって、電話をしてこないことも考えられる。

さて、そのどちらになるだろうか。

深夜に何度も叫び続けていたミツコ。

彼女は私に何を伝えたかったというのか。

私は机の上の電話機を見つめた。

それは今のところ眠っているように見えるが、数秒後には激しい音とともに、目を覚ますような予感がするのだ。

そう言えば、結局のところ、ミツコに自分の境遇をどう話すべきかを考えていなかった。

家族や友人に対しては、あらかじめ自分が惨めにならない程度のストーリーを準備をしておこうと思うのだが、ミツコに対しては、そういう小細工をする気にはなれない。

彼女には、自分を包み隠さず、ありのままに語りたいと思うのだ。例えそれが原因で彼女に嫌われても、そして別れることになってもいい。

それが神の意志ならば、素直に受け入れよう。

そうだ、どうして今までこんなことで悩んでいたのだろう。

今の私が本当の私なのだ。それ以上でもそれ以下でもない。

どうしてミツコから逃げまわる必要があるだろうか。

今まで一人思い悩んでいた自分が、嘘のように可笑しく思えた。

何も恐れることはない。

ミツコの前では、自然体で居ればいい。

今までもそうだったではないか。お互い素直な気持ちで語り合った。それで十分だ。

もし彼女に軽蔑されても、電話を切られることがあっても、全てを受け入れよう。

そして、ミツコという女性に出会えたことに感謝しよう。

ほんの少しの間だったが、彼女の声が私を勇気づけてくれたことは紛れもない事実である。

私があとひと月早く解雇されていたら、ミツコとは知り合えなかっただろう。

会社に、そして上司にも感謝しよう。

私には今の不遇さえも達観できる、豊かな気持ちが芽生えていた解雇が何だ。この程度のことです、自分は落ち込んだりはしない。

これからもしぶとく生きてやる。

そんな気持ちになれるのも、そうだ、ミツコのおかげである。

彼女は私にとって、大切な人なんだ。

今夜はミツコを待とう。

そして、これが最後になるかもしれないが、彼女の話をとことん聞いてやろう。

私の気持ちはようやく固まったのだった。

まもなく十二時を迎えようとしていた。

ミツコはきつと電話をしてくる、私にはどこか自信が湧いていた。時計の針が一つに重なる。

それを待ち構えていたかのように、電話のベルが鳴り出した。この瞬間を予想していたにも関わらず、その正確さには驚かされた。

電話の主は慌てているようだった。心に少しのゆとりも感じられない。

電話のベルは、悲鳴のように聞こえる。

「もしもし」

私は弾かれたように、受話器を持ち上げた。

「もしもし」

暗く沈んだ声を受話器から伝わる。それは若い女性のものとは思えなかった。まるで病床からようやく声を出す老人のようだった。

「ミツコさんですか？」

私は確認せずにはいられなかった。まるで自信が持てなかった。正直、誰かの間違い電話に出てしまったのではないかと思った。

「ヒロシさんですね、よかったです」

そんなミツコの声には、まるで感情の起伏が感じられない。

やはり昨夜、私でない誰かが電話口に出たので、それを警戒しているのだろうか。しかしそれにしても、いつものミツコとは違う。

「こんばんは。昨日は電話をくれたみたいだね」

私はそんなふうに言ってみた。

「ごめんなさい、他の社員さんから聞いたのですね？」

「はい、何か緊急の用件だったの？」

私はいつも通りに明るい調子で訊く。

このままではミツコの暗い雰囲気にも飲まれてしまう。自分だっておそらく彼女以上に辛い立場なのだ。ここで私がぐつと堪えなければ、彼女の支えになることなど到底できない。電話の最後には、お互い笑っていたいものだ。

「別に緊急という訳ではないのですが」

彼女は口を濁した。

では、深夜から明け方に至るまで何度も私に電話をしてきたのは、他に何か理由があるというのか。

今夜のミツコはどこか変だ。正面からぶつかってこない彼女に少々の苛立ちを覚えた。

電話の向こうで、彼女は小さくため息をついたようだった。

しばらくの沈黙。

「私、やっぱりヘンな女なんでしょうか？」

「えっ？」

突然の言葉に、私は適切な返答が見つからなかった。

藪から棒に、何の話だ。

「私、仕事を辞めようか、って思ってます」

私の心臓はえぐられるようだった。

もちろん彼女は、私が解雇されることを知らない。だから他意はないにせよ、そんな言葉を軽々しく口にしてもらいたくなかった。

「どうしてそんなことを言うの？」
自然と私は厳しい口調になる。

それは、ちっともミツコらしい台詞ではない。もし私の気を惹こうと冗談を言っているつもりならタチが悪い。少なくとも今の私には、冗談では済まされない。

「だって今、仕事がどうでもよくなって、全然身が入らないんです」

「一体、どうしたの？　いつもの君らしくない」

それは私の本心だった。

ミツコはしばらく黙り込んだ。どんな表現が私に対して最も効果的かを必死に考えているようだった。

そして意を決して、

「実は、私、見事に振られました」とぼつりと言った。

私は言葉を失った。

ミツコには恋人がいたのか。孤独な女ではなかった。それは私が勝手に作り上げたイメージだった。

それにしても意外な事実だった。てっきりミツコは、私がそうであるように、私を電話の中の恋人と見なしているのだと、これまで信じて疑わなかった。

実際には、それは私の妄想に過ぎなかった。彼女にはれっきとした彼氏がいたのだ。

しかし恋人がいたのなら、どうして何度も私に電話を掛けてきたのだろうか。私に頼るくらいなら、身近な彼氏に甘えればよかったではないか。

私の中には、理不尽な怒りが生まれ、見る見るうちに大きな形になっていく。

ひょっとすると、そんな彼女の浮気心が、知らず知らず彼氏の心

を傷つけていたかもしれないではないか。

「もしもし、ヒロシさん、聞いてます?」

黙ったままの私を、ミツコは放っておいてはくれなかった。

「ちゃんと聞いてますよ」

私はぶつきらぼうに言った。

自分の不快な気持ちを、十二分に伝えるやり方だった。まるでいつかの上司と同じだった。こんなことだけは誰よりもうまくできるものだ、ある意味感心する。自分がひどく薄汚く思えた。

「別れる時、彼は私に何て言ったと思います?」

私に答えはなかった。ミツコは構わず、そのまま言葉を続けた。

「お前は、仕事人間で女性らしさのかけらもない。付き合ってもつまらない、だそつです」

彼女はまるで他人事のように淡々と語った。

なるほど、だから仕事を辞めたい、か。

しかし彼氏と別れるのなら、今の仕事を辞める必要もないのではないか。

それに他人の言葉によって、仕事が左右されるといふのもどこか変である。人生とはそんないい加減なものではない。

何とも拍子抜けである。

これが今まで私に勇気を与えてくれた、ミツコの悩みだというのか。

今の私にとっては、何とも生ぬるい話である。こんなのは悩みのうちに入らないではないか。

「それで、君はどうするつもりなんだ?」

「えっ?」

まるで尋問のようだった。私の強い口調に、彼女は言葉を詰まらせた。

私は重ねて攻撃する。

「そんな程度のこと、仕事を辞めちまうのかい? 君の仕事にかける情熱は、その程度のものだったのか?」

ミツコは黙ってしまつた。

しかしその間にも彼女は体勢を立て直しているのだった。次の瞬間、すごい剣幕で反撃を開始した。

「私のこと知らないくせに、よくもそんなことが言えますね。私は深く傷ついているんです。あなたにはそれが分からないんだわ」

「ああ、全然分らないね。そもそも仕事なんてのは、自分の意志でやることなんだ。他人にどう言われようと関係ない」

「それは男性の発想です。恋人に振られてまで、どうして仕事にしがみつくなきゃあるんですか？」

「だから、そんなことを言うヤツは、こっちから願ひ下げにすればいいんだよ」

私は吐き捨てるように言った。

恋人とか仕事とか、同じ土俵で語ることではない。ミツコは何を言っているのか。

要するに今の仕事が辛いから、恋人を引き合いに出して、辞めることを正当化しているに過ぎない。

そんなに仕事が辛いのなら、さっさと辞めてしまえばいい。

働きたくても、職場を追われる人間だっているのだ。甘ったれたヤツに、仕事を語る資格などない。

「それじゃあ訊きますが、あなたには恋人いるんですか？」

ミツコの怒りはどうにも収まらないようだった。

「いや、いませんね」

「それなら、偉そうに言わないでください。そんな人に、振られた女の気持ち分かる筈がありません」

「そうですね、ちっとも分かりませんね。分かりたくもない。誇りを持って仕事ができないのなら、さっさと辞めてしまえばどうです。それで恋人とよりが戻せるなら、ぜひ辞めるべきだ」

「ええ、あなたに言われなくても、辞めますよ。辞めたからって恋人は戻っては来ませんけどね」

ミツコの口調はあくまで強かったが、所々声が上がっていた。ど

うやら電話の向こうでは泣いているようだった。

ミツコはもう何も言わなかった。すすり泣きをすることが、今や彼女の主張となっていた。

気まずい時間だけが流れていく。

もうお互いに話すことはないというのに、電話回線はつながったままだった。

今はミツコの泣き声を届けるためだけに、この電話が存在しているのだった。

どうしてミツコは、電話を切ろうとしないのか。

どうして黙ったままでいる？

私は彼女の言葉の続きをじっと待った。

今電話を切ってしまうえば、私と別れることになる、ミツコはそう考えているのかもしれない。いや、それは私の思い上がりか。

やはり彼女は心のどこかで、私を必要としている。

恋人に振られた今、頼りにできるのは私しかない、か。

私には再び、わずかな自信が回復していた。

お互い受話器を手にしたまま、何も語ろうとはしなかった。

どちらか先に口を開いた方が、相手に謝ることになる。しかしそれは負けを認めるようなものだった。

ひよっとして私は間違っていたのだろうか、後から後から不安が追いかけてきた。

失恋した若い女性を捕まえて、配慮が足りなかったのではないか、私は思いを巡らせる。

いや、それでも大筋は間違っていないと思う。

やや言葉がきつかったかもしれないが、彼女に仕事を辞めてもらいたくなかった。こうでも言わなければ、流れ始めた彼女の心を捉えることはできなかつただろう。

もし目の前でミツコとやり合っていたなら、おそらく頼の一つでも打っていたのではないだろうか。

こんな時、互いの表情が窺えない電話では、もどかしい気分だけが高まってしまふ。

果たして彼女には、私の素直な気持ちが届いただろうか。しかし責められるは、何もミツコばかりではない。

私も、実は冷静さを失っていた。

ミツコに彼氏がいたと知った辺りから、どうにもいつもの自分ではなくなっていた。

ミツコを奪っておきながら、いとも簡単に彼女を振った、無神経な彼氏とやらの腹が立った。本来、その男に向けるはずの怒りの矛先が、ミツコに向いてしまった。

私は鋭く尖った台詞を、被害者たるミツコに突きつけていた。

やはり少し言い過ぎだったかも知れない。後味が悪かった。

二人の間にできた深い溝を埋めるためには、彼女に何と言ったらよいだろう。

考えがまとまらなかった。

無理もない。彼女との戦いは、まだ決着がついていない。

今は一時休戦中で、お互い距離を保ったまま、睨み合っている状況である。急に相手が起き上がって、次なる攻撃を仕掛けてこないとも限らない。

私も緊張を解く訳にはいかないのだ。

しかしこのままではラチがあかない。

私は思い切って、電話の向こうに話し掛けた。

「本当に会社を辞めるつもりか？」

私には、戦う兵士の気分が蘇っていた。ここで攻めの姿勢を崩しては、彼女に負けるような気がした。

そんな私の声に、彼女は無反応だった。

私としては、例えどんな答えが返ってきてても、決してたじろがないことを決め込んでいた。わざと落ち着き払っている自分を演出した。

ミツコは今にも倒れてしまいそうな弱い身体に、すうつと息を吹

き込んで、一気呵成に勝負を掛けようしているのかもしれなかった。

「あなたには関係ないでしょ」

と、突然かすれた声で言った。語尾がよく聞き取れなかった。

私はその反応に少しほっとした。

ミツコは明らかに先程までの戦意を喪失しているようだった。言葉に勢いがなかった。

別れた彼氏の悪口を言ってやれば、彼女の気持ちはどれだけ紛れることだろう。

私はミツコに怒っているのではない。ミツコの情緒を不安定にした彼氏に怒っているのだ。

しかしそれを今説明するのは、どうにも困難に思われた。だからそれは口に出さずにおいた。

「仕事は辞めないでほしいんだ」

私は穏やかな声で言った。

決して優しさの片鱗は見せないつもりだった。そんな安易なやり方で、自分の気持ちを後退させたくはなかった。

「どうしてあなたに、そんなこと言う権利があるの？」

いや、それが立派にあるんだ、私は口元に笑みをもらした。

(ミツコ、君は仕事を突然クビになった人間の気持ちが分かるかい?)

私は心の中で語りかける。

(仕事をする君は輝いていた。一時の感情で、それを捨てるな。

これからもずっと輝いていてほしいんだ)

果たしてこの声はミツコに届くだろうか。

真つ暗な事務所の中、ぼんやり浮かんだ机と椅子だけが微動だにせず、私とミツコのやり取りを静かに見守っていた。

「何よ、黙り込んでちゃって。都合が悪くなるとそうするのね、ずるいわ」

ミツコは涙混じりに言った。すっかり声が変わっていた。

私はミツコが可哀想に思えた。

とつくに勝負はついている。彼女は結局、泣くことしかできない。自分に勝ち目がないことを、彼女は最初から解っていたのだ。

（泣かなくてもいいんだ、ミツコ。君は決して悪くない。いつも
のミツコでいればいいんだ）

私はそう伝えたかっただけなのだ。

そこで突然、電話が切れてしまった。

私は思いも寄らない事態に焦った。

慌てて受話器を強く耳に押し当てた。しかしそこに彼女の声はなかった。あるのは、断続する電子音だけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2714j/>

深夜に鳴り響くオフィスの電話

2010年10月11日14時57分発行